

浪江の こころ通信

・第113号・

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、町内全域に出されていた避難指示は、平成29年3月31日に「帰還困難区域」を除き解除されましたが、多くの浪江町民は福島県内外に分散して避難生活を続けています。町を取り巻く状況が徐々に変化の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

“浪江のこころプロジェクト”は、町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信(※1)」を通してお届けし、皆さんの思いや暮らしぶりを発信・共有しようとするものです。

一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※2)が中心となり、全国各地のNPO、大学などの皆さんが取材を進め、浪江町と連携し「浪江のこころ通信」を編集・発行しています。

※1 浪江のこころ通信は、町民の皆さんがお話した「こころ」を伝えることを大切にするため、取材者が聞き取ってまとめた原稿をほぼ原文のままで掲載しています。

※2 一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、大学、NPO、企業、経済団体、行政などが連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信／第113号」への
感想をお寄せください。

【連絡先】〒979-1592
浪江町大字幾世橋字六反田7番地2
「浪江のこころ通信」宛て
FAX 0240 (34) 4593





鈴木 大介さん(請戸)

取材者：特定非営利活動法人山形の公益活動を応援する会・アミル 石山
取材日：8月21日

地域の誇りとつながりを酒造りで甦^{よみがえ}らせた

江戸時代からの老舗、浪江町の鈴木酒造店。現在は、山形県長井市で株式会社鈴木酒造店長井蔵として、伝統を継承しながら、新しい縁を結び「誇り持てる酒造り」をされています。10年ぶりに浪江町で酒造りを再開される鈴木さん。その想いをお聞きしました。

◆浪江町から長井市へ移り住んでの酒造り
長井市に移り住んで9年になります。浪江町と長井市では気候が全く違い、長井市で酒を造るには、今まで培ってきた感覚が通じないところもあり、慣れるまで時間がかかりました。移り住んで、2年目の冬、元朝登山している人たちに誘われ、元日の午前3時ごろから山に登りました。長井盆地は水田地帯で散居集落。住宅の灯りがぼつりぼつりと未明の雪原の中に散りばめられていた。その灯りを見て感じたんです「ここは、良いところだ」と。それまでは雪が降ることや冬の辛さがありましたが。しかし、雪がなければ、良い水も流れません。また自分たちは、雪を使って酒の貯蔵をしています。雪がないと何も始まらない。雪原の景色を見た時、この風土がすべて酒造りにつながっているのだと思えたのです。

◆長井市での経験を浪江町でのチャレンジへ
浪江町での事業再開は、長井市で事業を始めたときから

ずっと想い続けてきたこと。ここでのやり方、事業の形をスマートにしたものが、浪江町での事業につながっていくと考えています。現在は、小ロット多品種。一つ一つの製造ロットがあまり大きくないので、小回りが利きます。その強みを活かして、付加価値の高いものを生産していこうと思っています。また、浪江町の原材料をメインに使うことで、浪江町の生産者の持続力を高めることを目指し、自分たちも力を尽くしていきたいです。浪江町で造る酒は3つの柱で考えています。1つ目のコンセプトは、浪江町で暮らしていた人たちが懐かしいと飲んでもらえる酒。2つ目は、浪江町の人たちが誇りを持てる酒。海外でのコンクールに出しても賞を狙えるくらいの酒です。これを作るためには、原料が大切になってくるので、地元の農家さんと共に造っていききたい。時間がかかるかもしれませんが取り組んでいきます。そして3つ目は、自由な発想でチャレンジし造っていく酒です。浪江町のものづくりで大事なことは、安全。浪江町の商品を買ってくれるお客さんは、何らかの価値を見出して購入してくれます。その期待を超える

◆被災地の食文化を次世代に
今、災害によって分断された地域の食文化が途絶えてしまいう危機感をもっており「甦る食のプロジェクト」にも取り組んでいます。浪江町の将来に不安感を抱いている人がいることは、致し方ないこと。ですが、どこで暮らしていても浪江町のこと、忘れられない。浪江町で生きていたからこそその精神性が形成されていると思います。新しいものづくりを進める中で、伝統食・郷土食を残していきたい。また、土地の暮らし、伝統を自分たちで守っていくことの大切さも伝えていきたい。それらを次世代に繋げていくことで、地域のものづくりの魅力が増していくと考えます。皆さんにも協力してもらえたらありがたいです。



村井 阿理沙さん(棚塩)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋
取材日：9月5日（オンラインによる取材）

今ある暮らしをより大事に思えるようになりました



▲地元の人たちとペットボトルのグリーンハウスのプロジェクトを立ち上げる

◆青年海外協力隊の活動
ジャマイカでの青年海外協力隊の活動は、思った以上に大変でした。行く前には、現地のNGOのサポートがあると思っていたのですが、全くなく、ゼロから良い時間でした。◆青年海外協力隊の活動
ジャマイカでの青年海外協力隊の活動は、思った以上に大変でした。行く前には、現地のNGOのサポートがあると思っていたのですが、全くなく、ゼロから

2年間の青年海外協力隊としての活動を経て復職、今は東京都で暮らす村井さん。今年のお正月は、祖父母との思い出がたくさん詰まった浪江町の家で、家族4人で3日間過ごされたとのこと。

◆浪江町とのつながり
震災の時、私は仕事でアメリカにいました。浪江町の家には、両親と当時は高校生だった弟が暮らしていました。地震の直後にSkype(電話)で父と連絡が取れ、無事を確認できたのですが、その後3日間連絡が取れず、不安が募って仕事も休んでいました。後日、連絡が取れ、家族全員の無事が確認できた時には、本当にホッとしました。浪江町の家は、祖父母が建て、暮らしていました。私たちが家族は、私が高校生の時まで、双葉町で暮らしていました。が、祖父母が高齢になったこともあり、祖父母の家に転居しました。私は、大学進学を機に家を出たので、浪江町の家で暮らしたことはありません。でも、父にとっては、祖父母との思い出があり、自分たち家族も暮らした大事な家です。震災から9年を過ぎた今も草取りや家の中の整理に、避難先の茨城県から定期的に通っています。今年のお正月は家族4人で、浪江町の家で過ごしました。2泊だけでしたが、とても、心地良い時間でした。

のスタートになってしまいました。私の職種はコミュニティ開発。地域のコミュニティづくり、ごみに関しての改善が目的でした。業務についての資料はありましたが、一緒に動いてくれるスタッフはおらず、はじめの数か月は町中を歩いて回り、これはと思う人に話しかけて情報収集しました。私が派遣されたのは、ジャマイカの都市部から少しはずれた田舎町でした。町の一番の課題は、ごみ問題。雨が降ると排水路にごみが詰まって、あちこちで冠水していました。ジャマイカにはリサイクルという概念がありません。町中にはごみ箱もないので、町の人たちは、ごみをボイ捨てしています。プラボトルがあちらこちらに転がっている様子を見て、思いついたのは、プラボトルを使ったごみ箱づくり。声を掛けることで少しずつ広がった、コミュニティの仲間と一緒に5つ作成、町中に置きました。次に私は、地元農家のグループと一緒に、「グリーンハウス」を作りました。鉄骨で枠組みを作り、数千というペットボトルをワイヤーでくくりつけていく作業は思った以上に時間と労力が必要で、2年間の派遣期間のぎりぎりまでかかりました。私が帰国した後に、現地ではジャマイカ政府の職員も招いて、オープニング祝賀会を開催したという連絡をもらいました。ペットボトルが有用な資源として活用できる事例となり、

ジャマイカ国内で取組が広がればと願っています。◆当たり前だったことが当たり前でなくなる
帰国し復職した今、2年間のジャマイカでの体験は、周囲の人たちとの関係性を見直すことにもつながっています。以前は、同僚に対して「このぐらいやってよ」「どうしてすぐにやってくれないの」といった思いで仕事をすることが多かったのですが、今は、「やってくれて、協力してくれて、ありがとう」といった気持ちになります。震災があったことで、私を含め多くの人たちの考え方が変わったと思います。それまで当たり前だった生活が当たり前でなくなる。大切な人やものをなくしてしまう経験を通して、今ある暮らしをより大事に思えるようになりました。震災から9年が過ぎ、浪江町も一部地域を除いて避難指示が解除され、町民が「戻れるような町づくり」が進められてきたと思います。そのために、役場をはじめ多くの人たちが汗を流されていることに感謝したいと思います。私にできることがあれば、できる限りのことはしたいと思っています。



▲ジャマイカ政府関係者および自治体の議員が見学に（左端が村井さん）